

少年のころ・・・ホタル

挿絵 墨（ルイ）

月影だけのあぜ道で

叔父と一緒に蛍狩り



小川のほとりに咲いている

花紫の つゆ草や

よもぎの葉裏に ふきの陰

薄く幽かな 青色の

小さな明かりが 浮かんでた

そつと近より 掌（テノヒラ）に

初めて 明かりをのせたとき

熱くないよと 思わずいった

熱くないさと 微笑みかえす

叔父の目にいた 小さなホタル

海軍の軍人だった おじぢゃまは

敗戦の年の 秋の日に

海岸で一人 旅立った

ホタル見るたび 思い出す

寂しさ秘めた 叔父の笑顔

ホーホー ホタル こい

もしおぢぢゃまの 御霊みたまなら

お菓子をおあげる 飛んできて

お酒も上げるよ 寄っといで

ホーホー ホータル こい

「作品について」

叔父は戦時中東京を離れられない父に代わり疎開先で暮らす幼年の私の父親をしてくれました。

海軍で身体をこわし除隊になり疎開先へ祖母とともにやってきたのです。

そして、終戦の年の秋、疎開先の海岸で覚悟の死を遂げました。

お酒が好きだったそうですが戦争中のことでお菓子やお酒を口にすることは出来ませんでした。

いずれ、叔父の思い出を書き上げるつもりです。

この作品は昨年6月16日日本WEB詩人会に掲載しました。

二〇〇三・九・二十五・UP

二〇〇七・〇一・二十九・リニューアル